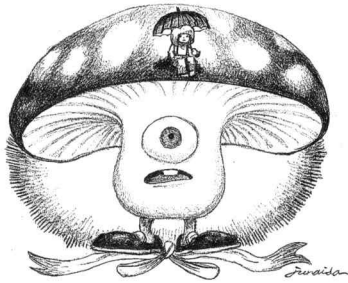


朝日 歌壇 俳壇



〈日曜日のブローチ 33〉 junaida

俳句時評 精緻と体当たり

岸本 尚毅

板倉ケンタの『一花一虫』(ふらんす堂)にある「秋冬となく繰りかへし蠅の来る」は奇妙な作だ。夏の季語の「蠅」と別に「秋の蠅」「冬の蠅」という季語があるが、この句は秋と冬ともつかない。「繰りかへし」は、秋にも冬にもという意味のようでもあるし、追い払っても何度も来る様子のようなものもある。無造作に蠅を詠んだようで、重層的なニュアンスを伴った巧緻な句とも思える。

〈雨粒のかさなりゆくは秋の百合〉は板倉の献立を記した一年間の句日記だ。

たとえば「五月三十一日」の献立は「チキンピラフ、卵スープ、スパイシーポテトビーンズ」。日記に「ミサイルが降る日も給食を作つてゐる。五月三十一日」とあり、その日の俳句は「スパイシーポテトビーンズテポドン」だ。

「テポドン」と「ポテト」の音の類似を面白がった作。五七五の定型にのせた言葉のリズムが生きていて、北朝鮮のミサイル発射という事態を俳諧にしてみたいかな句だ。

一九九九年生の板倉の精緻な句と、一九七八年生の北大路の体当たりの俳人格。現代俳句の開口は広い。(俳人)

第2回定家賞 短歌研究社主催。川野芽生さん(33)の第2歌集「星の嵌め殺し」(河出書房新社)に決まった。第2歌集以降の作品が対象。

第37回歌壇賞 鹿児島市の霧島茉莉さん(36)の「柔らかな襟」(30首)に決まった。「かりん」所属。本阿弥書店の「歌壇」誌の新人賞にあたる。

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます。

高山れおな選

嘆ほめられ欠伸ほめられ眠る嬰
(袋井市) 本多 りつ
虫籠の横に霧吹き月鈴子
(さいたま市) 水江 健治
人体は骨の積み木や冬初め
(高知市) 加田 紗智
豊年や土偶の腰のきゆんきゆん
(我孫子市) 藤崎 幸恵
エメラルドよりトパーズへ山粧ふ
(高松市) 桑内 蘭
ヒーローもヒーローも美男菊人形
(始良市) 井之川健児
熊手持つ社長囲める社員かな
(千葉市) 團野 耕一
大学へ滑走路へと熊走る
(川崎市) 吉田 泰子
不器用に移ろう季節大根煮る
(相模原市) 渋谷久美子
物十せば秋の匂ひに乾きをり
(京都市) 小島 一男

【評】本多さん。リフレインが奏功。歌い上げ効果の一方で客観性を担保。水江さん。月鈴子=鈴虫。優美な詩語とそっけない霧吹きとの取合わせの妙。加田さん。季節の変わり目には身体が意識される。なお、成人すると骨の数は二百個強となる。

小林貴子選

承和色の菊にひかるいのちかな
(東京都江東区) 鈴木 靖彦
苦しげに声絞る鹿 二月堂
(岐阜市) 木野村暢彦
熊のこと俳句に作るゆとりなく
(奈良市) 笹原 滋功
おちおちと粧ふ山を訪へもせず
(大阪府島本町) 池田 壽夫
白菜を刃切れよく割る江戸っ子よ
(横浜市) 田中 靖三
ごめんねと言へず息子へりんごトス
(いわき市) 岡田 木花
曳山が砂に食い込むくちなかな
(小城市) 福地 子道
AIと友達(二日)向は(二日)向は
(川西市) 糸賀 千代
赤秋や仲代達矢生き切りぬ
(福岡県鞍手町) 松野 賢珠
日記買ふまだ見つからぬ未来かな
(川越市) 横山由紀子

【評】一句目、承和色の菊とは黄菊で、承和の帝が愛したことによるとか。初めて知る言葉に感銘を受けた。二句目、鹿は秋の衰れを催す声か和歌の時代から詠まれるが、苦しげとは改めて心に迫る。三句目、四句目、今年の熊への思いは様々。

長谷川耀選

戦争の神はつごかす神無月
(東京都世田谷区) 野上 卓
木枯しや熊はせつなき胃を抱ふ
(日立市) 加藤 宙
秋深き尾瀬の草木の眠る音
(新潟市) 本間 安彦
戦争が真向ひにるる炬燵かな
(長崎市) 里中 和子
地獄から帰る一輪花一つ
(横浜市) 三玉 一郎
一面のガザの廃墟を虎落笛
(立川市) 須崎 武尚
熊穴に入らず人家をえ出でず
(相模原市) 井上 裕実
川原に熊恐れつつ羊煮会
(寒河江市) 大谷 正行
白鳥の白息の白湯気の白
(岐阜県揖斐町) 野原 武
熊だつてコンビニくらい自動ドア
(呉市) 山下 秀文

【評】一席。戦争の神だけはなお各地に。八百万の神々が出雲につどう神無月、旧暦十月。二席。熊に同情の一句。ひきつづき熊の句あまた。三席。草や木のさやぎに耳を澄ます。雪を迎える前の尾瀬。十句目。そのうち「熊、お断り」の札も。

大串 章選

身に入むや拉致被害者の母も老ゆ
(前橋市) 荻原 葉月
人生の余白にありて日向ぼし
(相市) 藤嶋 務
立冬の月道づれに一人旅
(横浜市) 白川 修
渡り鳥今日の唄はどの辺り
(横浜市) 吉村 幾子
初恋の人も傘寿や筆草
(大村市) 小谷 一夫
金木犀病の友に励まされ
(仙北市) 佐藤 明夫
廃校の時計正しく暮らし
(多摩市) 倉林 浩一
古書店のあの頃のまま秋の旅
(東かがわ市) 丸山 靖子
露の玉ほどの命と思へども
(埼玉県宮代町) 鈴木 清三
落葉を拾ふ人なき過疎の村
(岩倉市) 村瀬みさを

【評】第1句。北朝鮮による拉致被害者・横田めぐみさんの母上は今年89歳、一日も早い再会を心より願う。第2句。「人生の余白」とは言い得て妙。おだやかな日々をお過ごしください。第3句。この「一人旅」は人生の一人旅でもあろう。